

龍太賞

(新作十五句)

雛まつり

神奈川県 伊藤 節子

思ひ出は母の手料理雛まつり
看取る手をしばらくやすめ蝶の昼
誘ふとも誘ひ合ふとも蛩とぶ
ハワイアン音楽で梅雨払ひけり
打水のたちまち乾く昨日今日

受賞のことば

五十歳を過ぎてから始めた俳句が、いつの間にか三十五年余も経ちました。現在は九十五歳の夫を看取りながら、作句を続けております。私自身の自由な時間は大分制約されておりますから、外出もままにならず、今回の十五句は、日々の生活の中でのが殆どです。

このたびの思いがけない受賞に戸惑い、驚きつつ、俳句を続けてきた喜びで一杯です。選者の先生方から深く感謝申し上げます。

選にあたって

第六回龍太賞は「雛まつり」に決まった。雛祭と言っても、雛の句は第一句目だけである。何故「雛まつり」という題にしたのかと考えると、雛まつりの句に取り上げられた母上のことが、全体に流れるように込められているのを感じたからである。ご病気の母上を看病しているのだろうか、と思うのが六句目である。俳句は短い詩である。全部を言い切らないで、読者の想像に委ねる俳句が散見出来るこの作品群が龍太賞に該当したのだと思う。

(稲畑 汀子)

合づちを打ちつつ送る団扇風
身の丈に合ひたる暮し涼しけれ
万緑にひれふすごとし寺の屋根
夏終る岸辺にゆれる遊び舟
朝顔の数の減りゆく日々となり
コスモスの咲くところ風の通るみち
はやばやとビルの灯ともる秋の雨
心して夫の代りの賀状書く
十二月たちまち埋まる予定表
室咲や佳き人よりのよき便り

おだやかで、ささやかな作者の身边が平明なこ
とばでさらりと表現されており、すらすらと読む
ことができた「看取る手を」「心して」など、深
く読めば深刻にもなるが、読者に負担をかけない
句、そんなよさがあった。「万緑に」のおおきな
構えもよい。

(宇多喜代子)

自らの人生を諾い、日々を大事に過ごす作者。
その暮しぶりが四季を通じて見て取れる。(身の
丈に合ひたる暮し涼しけれ)には謙虚な人柄も窺
える。私の好きな句を一季一句と限ってあげると
(思ひ出は母の手料理雛まつり) (ハワイアン音楽
で梅雨払ひけり) (朝顔の数の減りゆく日々とな
り) (十二月たちまち埋まる予定表)となる。

(大串 章)

(朝顔の数の減りゆく日々となり)の秋の深まっ
てゆく季節感、(ハワイアン音楽で梅雨払ひけり)
の梅雨の鬱陶しさ一掃の壮快感を生かした佳句が
あった。また(思ひ出は母の手料理雛まつり)の
ように、長寿時代によって回想句がふえたように
も思う。二句を推敲中には身も心も若き日の甦っ
ていたことであろう。

(鷹羽 狩行)

稲畑 汀子選

選者賞 夏木立

神奈川県 押切 安代

その下の海中のごと青楓
栗の花降り出しさうな空の色
雨の日は雨の白さや梨の花
駅を出て潮の香りや白日傘
親王の墓所は高きに夏木立
小半時待ちて出掛ける夕立あと
くり返すピアノの稽古アマリリス
古文書の墨くろくると灯の涼し
水音にしばらく添ひて涼新た
終章に入るミステリー秋灯下
秋惜しむ旅の終りの夜汽車かな
膝毛布掛けて海辺のテラス席
短日や一人遅るる待合せ
寒土用白湯にて喉の落着きぬ
青空へ鳶を放ちて山眠る

選評

「夏木立」という題で十五句纏められた作品群である。〈親王の墓所は高きに夏木立〉から採られた題であろう。題に添うように木々の名前が取り上げられた句が多い。しかし一句／＼がしつかり作品として独立し、題に寄りかかっているのではないのがよかった。俳句は短い詩である。省略することで表現しなかった事柄が消えないで余韻として読者に伝わるのが大事である。春から冬へながれるように作品が続いて行く全体の纏め方も良かったと思う。

(稲畑 汀子)

宇多喜代子選

選者賞 半夏生

愛媛県 片山 一行

陽炎の無口に登る神楽坂
黎明に息づいてゐる桃の花
スコップの刺されし砂場青あらし
緑陰やポルシエに乗つた人の来る
定刻のとほりみんみん生まれけり
空蟬の脚の虚空に生きてをり
大夕焼メトロノームの動き出す
いもうとのくるぶし尖り半夏生
打水に短きことば告白す
三伏の鯉の背中の深き傷
烏瓜咲きて闇夜にためらはず
牛の尾のすらりと下がり夏了る
きりぎりす跳ね新しき乾電池
親不知しづかに疼き星流る
ふくろふの額はことごとく不隠

選評

一句の中の〈黎明に息づいてゐる〉〈空蟬の脚の虚空〉〈鯉の背中の深き傷〉などは、作者が桃の花や空蟬や鯉になつてゐるコケの濃いことば。そこを読みとる楽しみと、「牛の尾の」のような淡い一物仕立ての句を楽しむよさ、相俟つてスリルがあつて面白かつた。

(宇多喜代子)

大串 章選

選者賞 玉の緒

岡山県 名木田純子

やはらかき大地に 一步仔馬立つ
囀 や 鳥 獣 供 養 塔 に 雨
風は野に蝶々は風に戯るる
夜の底に古色を曳ける守宮かな
裏返るとき存在を消す海月
蟻の列 新幹線と平行に
木下闇出でて鴉の真黒なる
玉の緒を宿す曲線へびの影
風の端に鳴き急ぎたる秋の蟬
一筋の風を跨いでゆくばつた
空の青取り戻したる法師蟬
その上に大綿の浮き地球浮く
鷹の目の洋上の風捉へたる
梟の声に乗りたる森の夜気
日表に凍蝶の影こはれけり

選評

いろいろな動物が四季折々の自然の中で生きている。その生きざまは実にさまざま、空を飛ぶ「鷹」もあれば海に漂う「海月」も居る。地面を走る「蟻」も居れば這い進む「へび」も居る。その姿・行動をしっかりと言いとめたところに「玉の緒」一連の魅力がある。(蟻の列新幹線と平行に)その上に大綿の浮き地球浮く)など意表を突いた取合せもおもしろい。

(大串 章)

鷹羽 狩行選

選者賞 甲斐

神奈川県 松 実南天

星すぐに出揃ふ甲斐の牡丹鍋
笹鳴や干されて香る畠のもの
冬滝の泳へきれざるこゑ絞る
枯蓮を鳴らして風の乾きけり
竹馬を先に通して注連貫ひ
農具市荒砥ひと撫でして買へり
無駄口を叩かず聞かず種選
桜守それとわからぬやうに坐す
井に恃む暮らしの水や柿若葉
夏掛けのさざ波ほどに皺のよる
それつきり釣れぬ山女の魚籠見遣る
樹を替へて山鳩鳴ける秋時雨
新涼や柀目つらぬく柱拭き
一隅の高々しぶく崩れ築
甲斐駒へ羽音尾を引く暮の秋

選評

全体的にレベル・アップが見られた一方、類句・類想句も若干ふえたように思う。最終審査会にあがった句稿の文字はみな丁寧で、十五句の並べ方にも工夫があった。〈農具市荒砥ひと撫でして買へり〉〈無駄口を叩かず聞かず種選〉〈桜守それとわからぬやうに坐す〉など、気候、風土、生活感情がとらえられていた。

(鷹羽 狩行)